

〔大東文化大学所蔵日本書跡解題〕（監修・高城弘一教授）

## 古筆手鑑

野 中 直 之  
高 田 智 仁  
西 片 由 貴

### 〔基礎データ〕

- ① 請求記号…W／／2471
- ② 図書番号…111267151X
- ③ 執筆年…奈良時代から江戸時代
- ④ 材質・形状…紙本墨書・折帖
- ⑤ 員数…一帖（計一三四葉・表面六十六葉・裏面六十八葉）
- ⑥ 寸法…縦三八・八センチ 横二五・六センチ
- ⑦ 付属品…朱漆塗箱、包裂、「筆者目録」、「古筆手鏡目録」
- ⑧ 外題…「手鑑」（装飾料紙）
- ⑨ 状態…良（朱漆塗箱に痛みあり）
- ⑩ 受入…2004年度
- ⑪ その他…「大東文化大学所蔵 貴重書跡図版目録Ⅰ」所載

### 〔解題〕

手鑑とは、古人の筆跡（手）である古筆切や短冊、色紙等を鑑賞や手習いの手本（鑑）とするために貼り込んだ帖のことを指す。江戸時代前期には多くの古筆手鑑が作られるようになり、その製作には古筆家をはじめとする古筆鑑定家が大きく関わっていた。鑑定家は、各古筆切を鑑定するだけでなく、手鑑行列という古筆切の配列に則って手鑑を製作していた。当然稀有な古筆切を必ずしも貼り込むことができるわけではなく、また製作者の意向にも左右される

が、手鑑行列では表面は伝聖武天皇筆「大聖武」（賢愚経断簡）、伝光明皇后筆「蝶鳥下絵経切」（法華経断簡）から始まり、以下天皇、親王、撰関家、公卿、御子左家、二条家、冷泉家と続き、裏面は聖徳太子から能書、世尊寺家、法親王、高僧、連歌師、武家、女筆へと至るのが理想とされる。

本手鑑では聖武天皇、光明皇后から始まり、手鑑行列の配列に従っているが、貼り替えの跡が多数見られ、また手鑑行列も乱れている点から、製作当初とは所収内容が変更されていると思われる。しかしながら、伝藤原有家筆「墨流切（多田切）」、伝西行筆「曾丹集切」、伝藤原俊成筆「頭広切」などの固有古筆名を有した名物切も所収しており、見ごたえのある手鑑である。

また、本手鑑の断簡に添付されている極札を見ると、古筆本家では五代了珉（一六四五—一七〇二）、古筆分家では三代了仲（一六五六—一七三六）、また三代神田道徳（一六三三—一七一七）、三代畠山牛庵（？—一七二七）によるものが時代の下ったものになる。このことから、十八世紀の初期の製作であろうか。殊に分家三代了仲の極札が極端に多いことから、この了仲が製作に大きく関わっていたのであろう。

最後に、本手鑑の解題は表面二回・裏面二回の計四回に分けて掲載を予定する。本年度は表面のうち、冒頭の「聖武天皇」から「中院殿通村公」までの三十七葉を扱うこととする。また、本解題は野中直之を責任編集として、高田智仁、西片由貴の計三名による分担執筆によって行う。（各断簡の末尾には担当者を記した。）

なお、本解題内にて掲載する図版の縮尺率は一定ではない。特に掲載図版が小さくなってしまう断簡もあるが、『大東文化大学所蔵 貴重書跡図録目録Ⅰ』（大東文化大学院文学研究科書道学専攻 二〇一一年）に一部拡大した図版の掲載があるため、本解題では省略することとする。また、本手鑑の全体像及び付属品である「筆者目録」、「古筆手鏡目録」の図版も同書に掲載しているため、同じく省略している。（野中）

〔凡例〕

本解題の各古筆切における丸付き数字は以下を示す

① 極札の表書の翻刻及び鑑定者名

② 料紙の紙質

③ 法量（縦×横）

④ 出典（和歌番号などは原則として『新編国歌大観』に準拠した。なお、經典については『大正新脩大藏經』に基づき、經典に付された通し番号、巻数、頁数の順に付した。）

⑤ 推定書写年代

⑥ 伝称筆者の出自及び生没年

〔翻刻〕（判読不能な場合は推定文字数分「■」で充当した）

〔備考〕（ツレに関する情報等）

一、名葉集類の内、『古筆家秘蔵』・『古筆切目安』・『古筆名葉集』・『増補新撰古筆名葉集』については、伊井春樹『新版古筆名葉集』（和泉書院一九八八年）によった。

一、『古筆切名物』については、武田則夫「翻刻 古筆切名物」（『MUSEUM』二二六号 一九七〇年）によった。

一、『昭和古筆名葉集』については、高城弘一『覆刻昭和古筆名葉集』（大東文化大学人文科学研究所 二〇一二年）によった。

一、本解題の執筆に際して、『古筆学大成』・『古筆手鑑大成』・『日本書蹟大鑑』・『徳川黎明会叢書 古筆手鑑篇』・『古筆切影印解説』・『国文学古筆切入門』・『古筆切資料集成』・『平成新集古筆名葉集』などに代表される、古筆切及び古筆手鑑の影印・翻刻本について、古筆切研究の根幹資料として周知の文献であると判断した場合には、原則として、著者（編者）や出版社名、刊行年次などの指摘を省略した。

表1（1 聖武天皇 2 光明皇后）

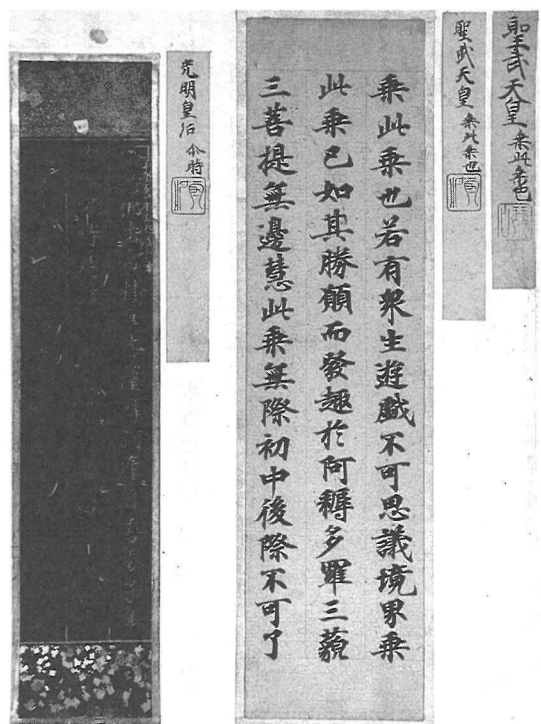


表2（3 後白河院 4 天神 5 智証大師）



表3 (6 伝教大師 7 慈覚大師 8 聖玉僧正)

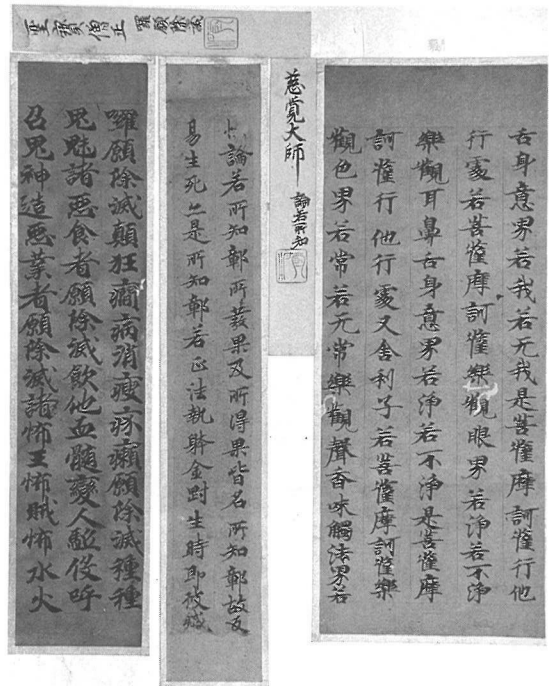


表4 (9 解脫上人 10 平判官康賴 11 玄惠法印)

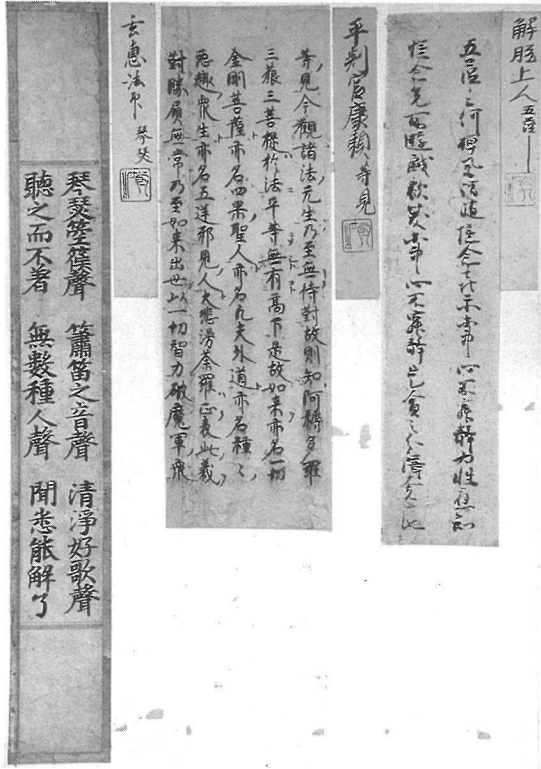


表5 (12 張即之 13 大夫坊覺明)

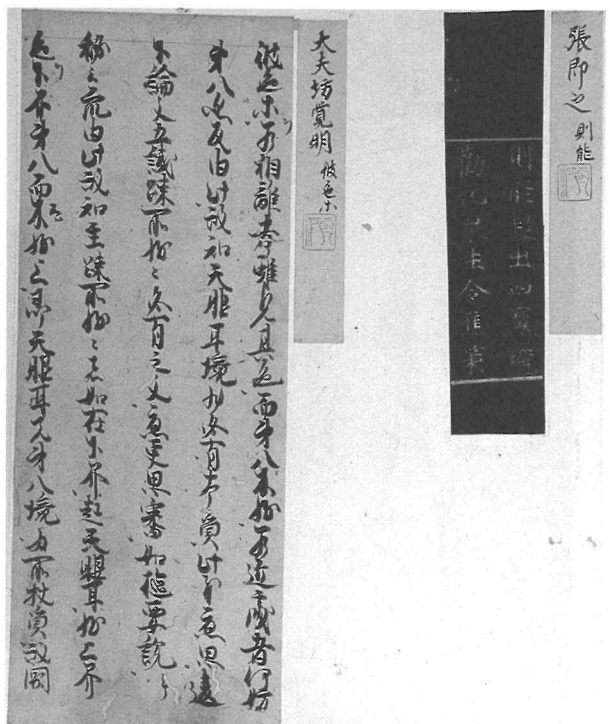


表6 (14 後深草院)

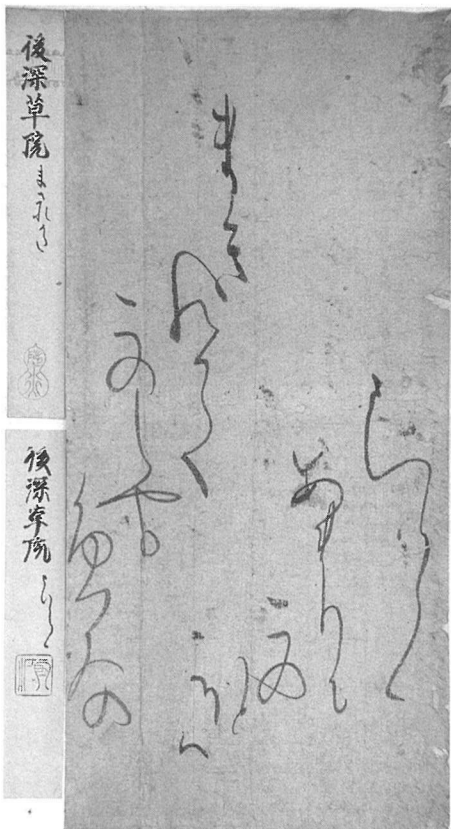


表7 (15後伏見院)

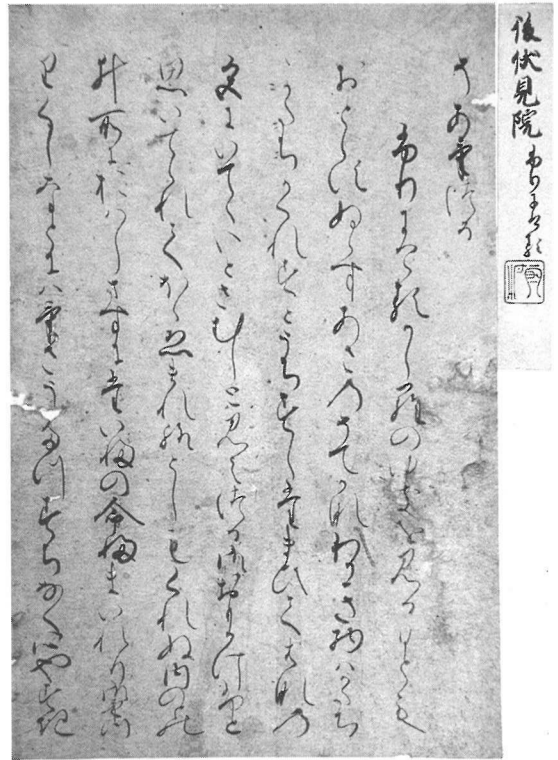


表9 (18後醍醐天皇 19高倉殿永慶卿)

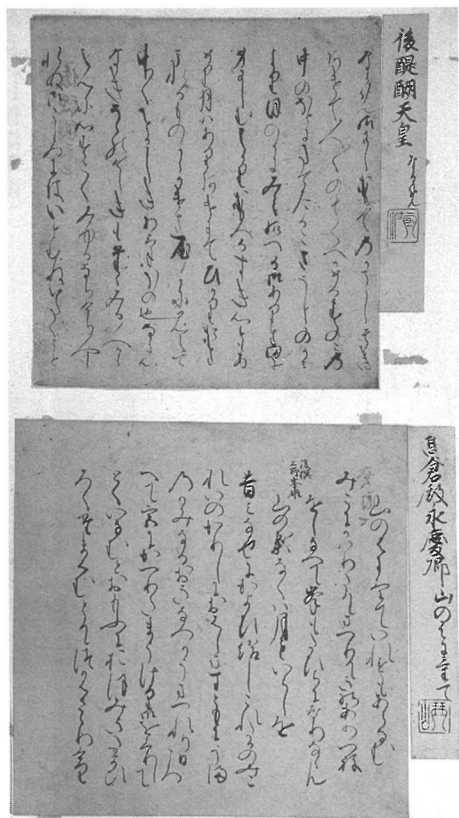


表8 (16後二条院 17大藏卿有家)

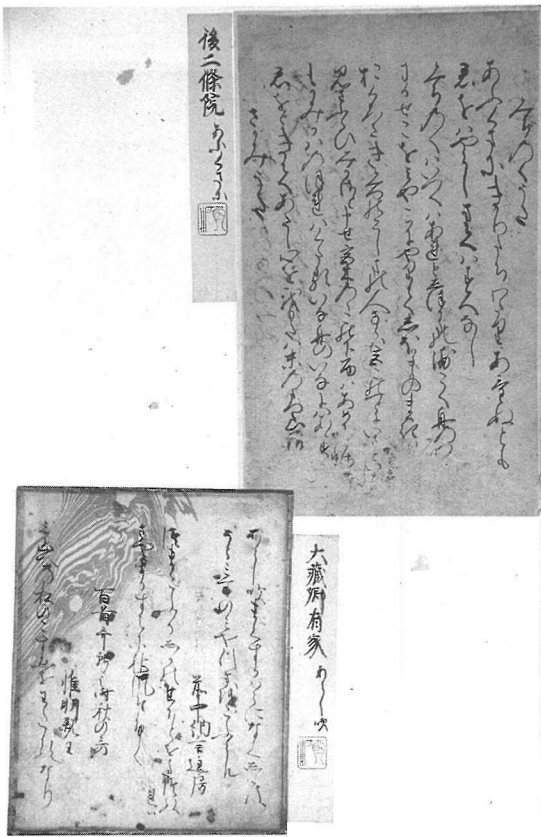


表10 (20光厳院)

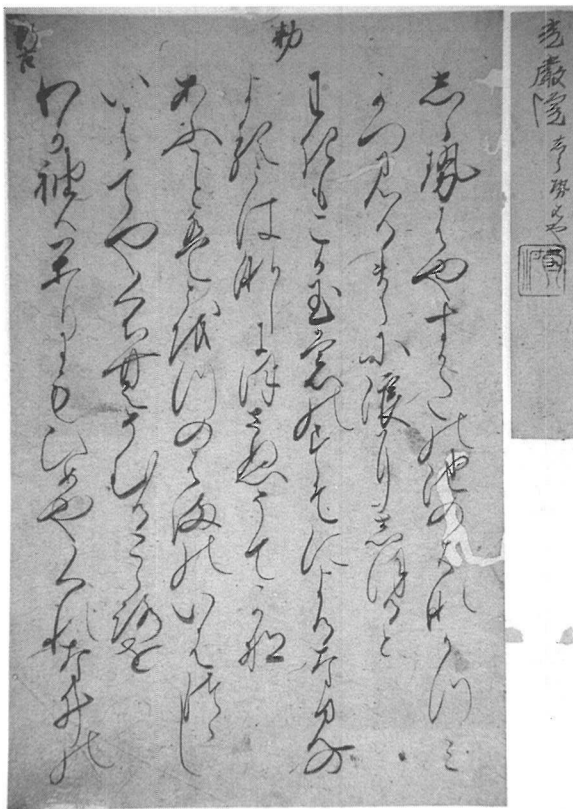


表11 (21後光嚴院 22為家卿)

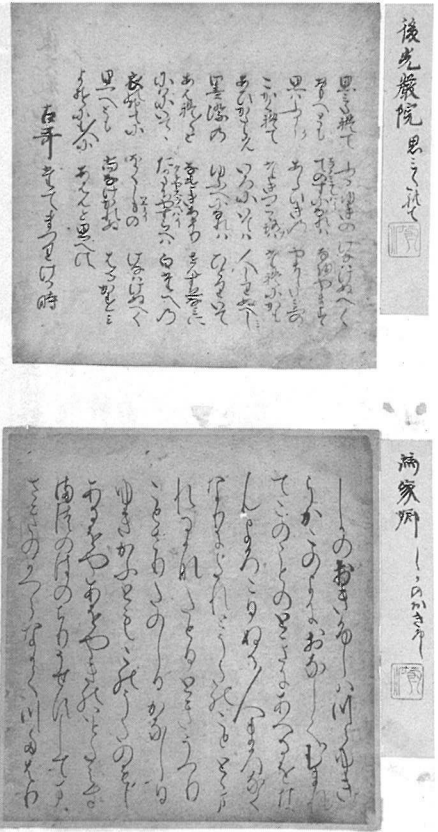


表13 (24後陽成院 25万松院等貴)

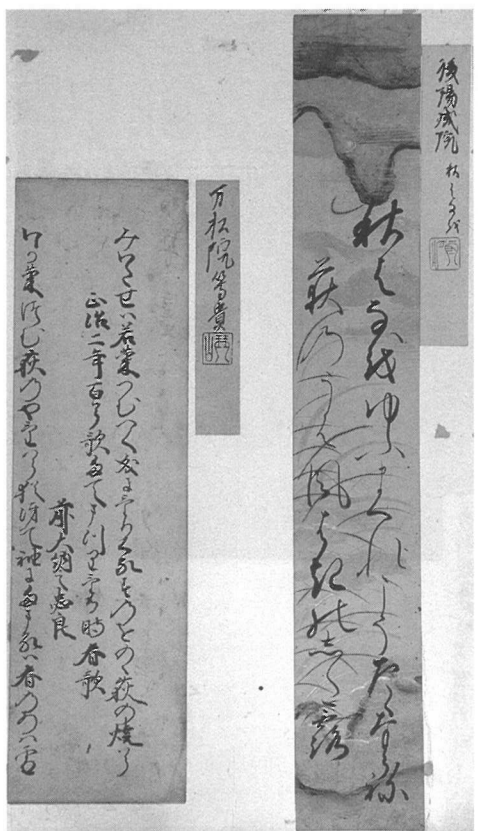


表12 (23後円融院)

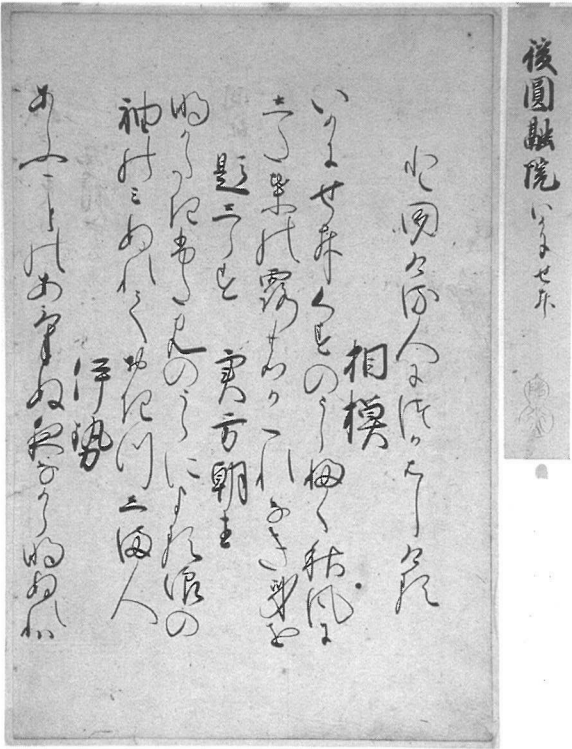


表14 (26醍醐聖宝 27近衛殿植家公)

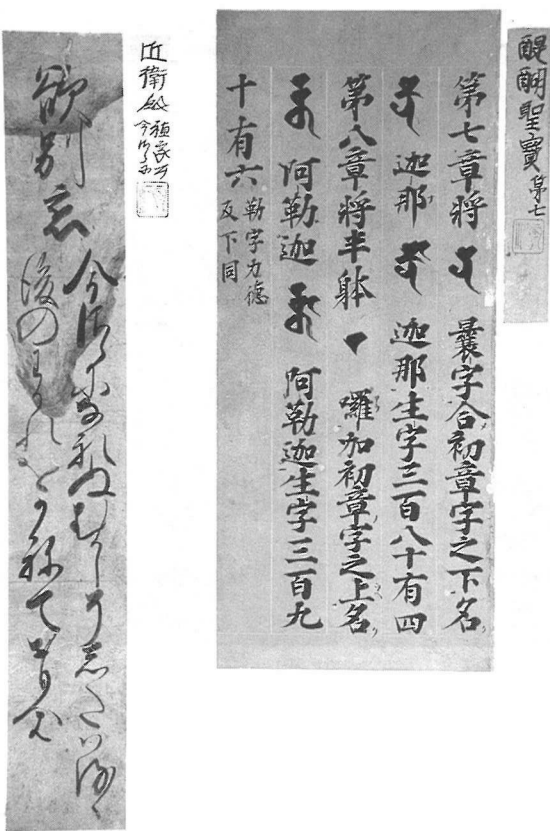
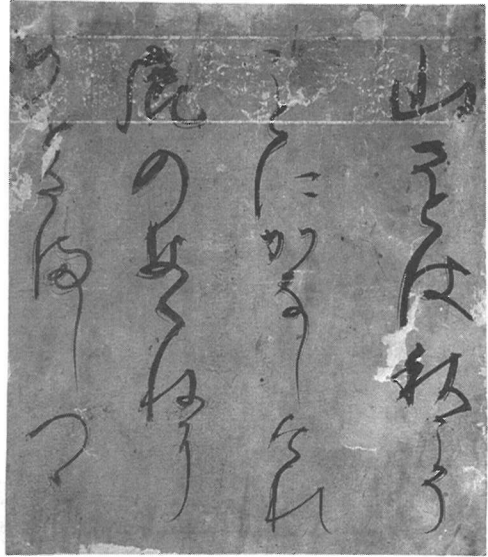


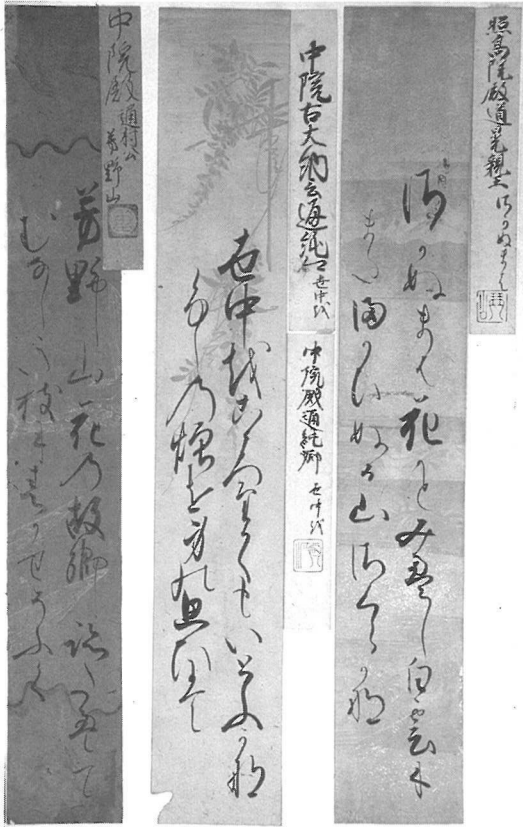


表19 (34近衛殿信尹公)



近衛殿信尹 公

表20 (35照高院殿道晃親王 36中院古大納言通純卿 37中院殿通村公)



### 1 聖武天皇 中聖武〔大宝積経〕

①「聖武天皇乘此乘也」(黒)「本家二代古筆了榮の代筆か

山琴村守 (黒)「分家三代古筆了仲

②麻紙

③二七・八×七・一センチ

④大宝積経卷第二十一 (No.310 十一卷一一八頁)

⑤奈良時代

⑥聖武天皇 (第四十五代天皇、七〇一―七五六)

#### 【翻刻】

乘此乘也若有衆生遊戯不可思議境界乘

此乘已如其勝願而發趣於阿耨多羅三藐

三菩提無邊慧此乘無際初中後際不可了

#### 【補考】

聖武天皇の筆とされる経切のうち、大字をもつて一行十三字前後にて書写されたものを「大聖武」とし、一行十七字前後によるものを、字の大小によって「中聖武」、「小聖武」として分別する。本断簡は茶毘紙に書されたものではないものの、字数のほか、書き振りからも世に流布する「中聖武」の一つとしてみて差し支えないものと思われる。「大聖武」が『賢愚経』を書写したものであるのに対して「中聖武」は一定しておらず、本断簡の『大宝積経』をはじめとして、『華嚴経』、『長阿含経』ほか未詳経も含むなど多岐に渡っている。

(高田)

## 2 光明皇后 経切〔妙法蓮華経〕

- ①「光明皇后<sup>余時</sup>」村守〔黒〕「分家三代古筆了仲
- ②紺紙金泥
- ③二五・九×五・三センチ
- ④妙法蓮華経卷六 法師功德品第十九 (No.262 九卷四十七頁)
- ⑤平安時代
- ⑥光明皇后（聖武天皇の皇后、七〇一―七六〇）

### 〔翻刻〕

余時佛告常精進菩薩摩訶薩若善男子善  
女人受持是法華経若讀若誦若解説若書  
寫是人當得八百眼功德千二百耳功德八

### 〔補考〕

擦れたためにやや本文が見難いが、紺紙に銀罫を引き、金泥をもって『法華経』巻六 法師功德品第十九の冒頭を書写した断簡。経の上下には金銀の切箔が撒かれている。また、冒頭に後補と思われる朱の注付けがみえるほか、同筆による訓点が見える。光明皇后を筆者とする経切としては「蝶鳥下絵経切」が著名だが、本断簡のような紺紙金泥経も数こそ多くないものの宮内庁書陵部所蔵「手鑑」〔「光明皇后替物」法華経卷三・授記品第六〕ほかにみることができ  
(高田)

## 3 後白河院 経切〔華嚴経〕

- ①「後白河院<sup>是安住</sup>」村守〔黒〕「分家三代古筆了仲
- ②紫紙金泥
- ③三〇・八×五・五センチ
- ④大方広仏華嚴経卷第十 明法品第十四 (No.278 九卷四六一頁)
- ⑤高麗か
- ⑥後白河天皇（第七十七代天皇、一一二七―一一九二）

### 〔翻刻〕

是安住清淨身口意業已所説善根教化衆  
生種種方便所言不虛能令衆生皆得歡喜  
彼菩薩摩訶薩諸所施行乃至無有一念錯

### 〔補考〕

『古筆名葉集』をはじめとした諸資料には、紫紙金泥にて金罫を有するとする『華嚴経』は記載されていない。後白河天皇を伝称筆者とする経切は少なく、紫紙金泥のものは『古筆手鑑大成』ほかには見当たらない。同天皇筆とする経切のなかには子持罫を有する「法勝寺切」のような高麗経が多く伝存する。  
(高田)

## 4 天神 紫切〔金光明最勝王経〕

- ①「天神<sup>假令我</sup>」村守〔黒〕「分家三代古筆了仲
- ②紫紙金泥
- ③二六・一×三・七センチ



④ 金光明最勝王經卷第五 蓮華喻讀品第七 (No.665 十六卷四二三頁)

⑤ 奈良時代

⑥ 菅原道真 (平安初期の廷臣、八四五―九〇三)

【翻刻】

假令我舌有百千 讚歎一佛一功德

於中少分尚難知 況諸佛徳無邊際

【補考】

紫紙金字で『金光明最勝王經』巻五を書写したものの、本紙にはうつつすらと金界がみえる。伝菅原道真の経切として「河内切」、「北野切」、「筑紫切」などがあり、それらを総称して「紫切」とする旨、『新撰増補古筆名葉集』にはみえている。伝称筆者を菅原道真とする金光明最勝王經の断簡は多く遺されているが、なかでも本経切は「藻塩草」(京都国立博物館蔵)、「藁叢(天)」(徳川美術館蔵)、「あけぼの(上)」(梅沢記念館所蔵)に収められている「河内切」とする一群の経切と趣を同じくしている。(高田)

5 智証大師 経切〔法華経安楽行義〕

① 「智証大師具足無減修」村守 (黒) 分家三代古筆了仲

② 楮紙

③ 二五・九×三・七センチ

④ 法華経安楽行義 (No.1926 四十六卷六九九頁)

⑤ 平安時代初期か

⑥ 円珍 (平安初期の天台僧、八一四―八九一)

【翻刻】

具足無減修 所謂彼身根 於諸如来常 決定分明觸

具足无減修 所謂彼意根 於諸如来常 決定分明識

【補考】

本経切は、上部に一・五センチ、左辺に最大で〇・三センチほどの素紙を切継いで形が整えられている。そのため、当初の大きさについては分からない。また『古筆名葉集』等のなかには本経切と該当するものは見出せない。伝智証大師筆として『法華経安楽行義』が書写されたものに「手鑑」(白鶴美術館蔵)、「筆林」(三井記念美術館蔵)などがあるが、いずれも本経切と同筆のものともすることはできない。上掲の手鑑に収められた切がいずれも行意を有した書風であるところからすれば、本経切も行意を有するが故に智証大師に擬せられたものではないかと推察する。(高田)

6 伝教大師 経切〔大般若経〕

① 「傳教大師舌身意界」村守 (黒) 分家三代古筆了仲

② 楮紙

③ 二四・八×九・七センチ

④ 大般若波羅蜜多経巻第五八九 (No.220 七卷一〇四八頁)

⑤ 奈良時代

⑥ 最澄 (天台宗の開祖、七六七―八二二)

【翻刻】

舌身意界若我若无我是菩薩摩訶薩行他

行處若菩薩摩訶薩樂觀眼界若淨若不淨

樂觀耳鼻舌身意界若淨若不淨是菩薩摩訶薩行他行處又舍利子若菩薩摩訶薩樂觀色界若常若無常樂觀聲香味觸法界若

### 〔備考〕

本經切は伝称筆者を伝教大師最澄とするが、その書き振りから奈良時代の經切と思われる。伝教大師として伝えられる『大般若經』としては焼損がみられる「焼切」が諸資料にみえるなど著名な切ではあるが、本經切には焼け跡がみえないためそれらと一連のものとすることはできない。このほか、同經を書したなかでの変りものとして、『出典判明仏書・經切一覽稿』に伝教大師筆とする銀字經の「大般若經」(『皇室の至宝 東山御物2』)がみえている。(高田)

## 7 慈覚大師 未詳經切

- ①「慈覚大師<sup>論若所知</sup>」  
村守 (黒) 分家三代古筆了仲
- ②楮紙
- ③二七・〇×四・二センチ
- ④未詳經
- ⑤平安時代
- ⑥円仁(最澄の弟子、七九四―八六四)

### 〔翻刻〕

■論若所知鄣所發果及所得果皆名所知鄣故及易生死亦是所知鄣若正法執鉢金剛生時即被滅

### 〔備考〕

『大正新脩大藏經』のなかには本經切と該当する本文を見出せず、未詳の經切となる。そのツレについても『古筆手鑑大成』等には確認できない。本經切は四周に同系色の素紙が切継がれて現在の大きさとなっており、元の本紙そのものはふた周りほど小さいものとなっている。その元の經切には下部にわずかな欠損がみえるほか、裁断によつて欠けた一行目末尾の「故」、「及」の右払いが台紙上において補筆されている。(高田)

## 8 聖宝僧正 經切「孔雀明王經」

- ①「聖寶僧正<sup>囉願除滅</sup>」  
村守 (黒) 分家古筆三代了仲
- ②楮紙
- ③二五・四×五・五センチ
- ④仏母大孔雀明王經卷中 (No.88 十九卷四三二頁)
- ⑤平安鎌倉時代か
- ⑥聖宝(平安初期の真言僧、八三二―九〇九)

### 〔翻刻〕

囉願除滅顛狂癩病消瘦疥癩願除滅種種  
鬼魅諸惡食者願除滅飲他血髓變人驅役呼  
召鬼神造惡業者願除滅諸怖王怖賊怖水火

### 〔備考〕

『仏母大孔雀明王經』巻中を一行十七から十八字にて書写したもので、朱による界とともに朱の句読点が随所にみえる。『古筆名葉集』などにおいて本經切に該当するものは見出せず、『出典判明仏書・經切一覽稿』にも伝称筆者を

聖宝とした『孔雀明王經』は挙げられていない。どのような経緯から極められたのかは判然としないが、聖宝とする一連の経切のなかには大聖武を思わせる肉厚なものが多く、本経切もそうしたところに由来するのであろうか。

(高田)

## 9 解脱上人 仏書切〔大乘広五蘊論の注釈書か〕

- ①「解脱上人<sup>五蘊</sup>」村守〔黒〕「分家古筆二代了任
- ②楮紙か
- ③二三・八×五・三センチ
- ④大乘広五蘊論の注釈書の類か(参考: No.1613 三十一卷八五三頁)
- ⑤鎌倉時代
- ⑥貞慶(平安末期の法相宗の僧侶、一一五五—一二二二)

### 〔翻刻〕

五蘊云何掉挙謂隨憶念喜樂等事心不寂靜為性應知  
憶念先所遊戯歡笑等事心不寂靜是貪之分障奢<sup>摩</sup>他

### 〔補考〕

一行二十二字。「五蘊」以下は『大乘広五蘊論』であることから、同仏書についての注釈書かと思われる。裏書には「けたつ」の墨書がみえる。解脱筆として『増補新撰古筆名葉集』に「巻物切 草書聖教」、『昭和古筆名葉集』に「巻物切 草書聖教高一尺野上下八寸九分」とあるほか、『古筆切名物』には「巻物切 行書 論釈類」として挙げられており、本経切もこうした「巻物切」の一つとして考えられる。また、本経切と同じく行書・草書の未詳仏書が「藁叢(天)」(徳川美術館蔵)にみえており、本経切を含めて行草意を有した仏書切

を解脱上人とする向きがあったことが窺える。

(高田)

## 10 平判官康頼 仏典切〔三密鈔か〕

- ①「平判官康頼<sup>等見</sup>」村守〔黒〕「分家古筆三代了仲か
- ②楮紙か
- ③二三・二×七・七センチ
- ④三密鈔巻下 (No.2710 八十四卷七九八頁) ほか
- ⑤鎌倉時代か
- ⑥平康頼(平安時代末期の武士、一一四六?—一二二〇)

### 〔翻刻〕

等見今觀諸法无生乃至無待對故則知阿耨多羅  
三藐三菩提於法平等無有高下是故如来亦名一切  
金剛菩薩亦名四果聖人亦名凡夫外道亦名種々  
惡趣衆生亦名五逆邪見人大悲漫荼羅正表此義  
對勝負無常乃至如来出世以一切智力破魔軍衆

### 〔補考〕

一行二十字から二十一字で墨書の送り仮名、朱筆の声点、返り点が付される。本文は『三密鈔』巻下のほかに『大毘盧遮那成仏経疎』巻七、『悉曇藏』巻七とも一致し、いずれを出典とするかは不明。四行目と紙継ぎで隔てられる五行目は連続せず、五行目は本来は前四行より以前にあるべき本文である。裏書の墨書については判然としない。なお、平康頼を伝称筆者として現存する切は多くないが、近年「摩訶止観切」(真福寺切)のツレについて報告がなされている(小林強蔵・伝康頼摩訶止観切覚書)参照。(高田)

## 11 玄恵法印 経切〔妙法蓮華経〕

- ①「玄恵法印<sup>琴瑟</sup>」村守〔黒〕「分家三代古筆了仲
- ②楮紙
- ③三三・〇×三・七センチ
- ④妙法蓮華経卷六 法師功德品第十九 (No.262 九卷四十八頁)
- ⑤高麗
- ⑥玄恵（南北朝時代の天台僧、?—一三五〇）

### 〔翻刻〕

琴瑟箏篋聲 簫笛之音聲 清淨好歌聲  
 聴之而不著 無數種人聲 聞悉能解了

### 〔補考〕

本経切は『妙法蓮華経』卷六 法師功德品第十九を筆写したものの、『昭和古筆名葉集』ほか、古筆の名物集に所載される玄恵筆とする経切のなかには本経切の特徴に該当するものは見出せない。また、ツレについても『古筆手鑑大成』ほかの各資料のなかにはみることができない。書風はもとより、上下の余白、子持野であることから鑑みると、日本で書写されたものではなく高麗経の類であらうか。

（高田）

## 12 張即之 経切〔華嚴経〕

- ①「張即之<sup>明能</sup>」村守〔黒〕「分家三代古筆了仲
- ②紺紙金泥

③一七・一×四・〇センチ

④大方広華嚴経卷十五 賢首品第十二之二 (No.279 十卷七十六頁)

⑤高麗

⑥張即之（南宋の書家、一一八六—一二六六）

### 〔翻刻〕

則能超出四魔境  
 勸化衆生令進策

### 〔補考〕

本経切は『華嚴経』卷十五における「則能超出四魔境 速成無上仏菩提／勸化衆生令進策 常勤供養於三宝」の一節を書写したもので、四句のうち傍線部の二句のみを残す。下部にみえる界線は金泥によって引かれたものではなく、箔によって貼られた後補のものである。張即之を伝称筆者とする経切は宋風・高麗風の書きぶりのものが多く、本経切も上下の余白などからするとそれらに該当するのではないかと考えられる。『出典判明仏書・経切一覽稿』には張即之とされる『華嚴経』がみえているが、ツレかどうかは未確認のため不明。

（高田）

## 13 大夫坊覚明 経切〔成唯識論述記本文抄〕

- ①「大夫坊覚明<sup>彼色等</sup>」村守「分家三代古筆了仲
- ②楮紙
- ③二八・九×一一・〇センチ
- ④成唯識論述記本文抄 論第二卷本文抄十一 (No.262 六十五卷四九七頁)
- ⑤平安末〜鎌倉時代初期か

⑥大夫坊覚明（平安末期の僧侶、生歿年不詳）

【翻刻】

彼色等若相離者雖見其色而第八不縁若近處者何妨

第八亦反由此故知天眼耳境非必有本質此義應思違

下論文五識疎所縁々必有之文應更思審如樞要説云々

秘云疎由此故知至疎所縁々者如在下界起天眼耳縁上界

色下界第八而不縁上即天眼耳无第八境為所杖質故闕

【補考】

一行二十二字から二十三字、送り仮名ならびに墨句点を有する。本文二行目の末尾にある「違」字は周りの墨色と異なるほか、「え」の跡が見えており、誤字訂正がなされたものと思われる。特徴としてよく似たものに『増補新撰古筆名葉集』の「経論切 行書墨字スミ卦片カナ付アリ」があるが、本書には異は付されておらず、詳細については判然としない。（高田）

14 後深草院 常盤切〔仮名書状〕

①「後深草院まささかた」随道（朱）三代畠山牛庵

村守（黒）分家三代古筆了仲

②楮紙

③二九・七×一三・九センチ

④仮名書状

⑤鎌倉時代

⑥後深草天皇（第八十九代天皇、後嵯峨天皇第二皇子、一二四三―一三〇四）

【翻刻】

まいらせ候

あまりに

この

まき ほと

れて は

このしやり

ふつ人の

【補考】

後深草天皇を伝称筆者とする本断簡であるが、『昭和古筆名葉集』の「後深草院」の項には、「常盤切 眞名カナ文、杉原鳥ノ子版経裏ナドアリ高九寸」と記載されている。本断簡を実見すると、裏面の空罫のような跡を窺うことができる。さらに断簡の高さも、他の断簡とほぼ同じ点から、この「常盤切」にあたると思われる。「常盤切」とされる断簡は、「藻塩草」（京都国立博物館蔵）や「見努世友」（出光美術館蔵）の国宝の手鑑をはじめ多数見ることができる。（野中）

15 後伏見院 四半切〔源氏物語（梗概本）〕

①「後伏見院ふりにける」村守（黒）分家三代古筆了仲

②斐紙か

③二五・四×一六・七センチ

④源氏物語 末摘花（梗概本）

⑤鎌倉時代

⑥後伏見天皇（第九十三代天皇、伏見天皇第一皇子、一二八八―一三三六）

【翻刻】

そあけつる

ふりにけるかしらのゆきを見るひとも

おとたすぬらすあさのそれかなわかき物はかたち

かたちかくれすとうちすしたまひてはなの

色にいて、いとさむしと見えつる御おもかけふと

思いてられてほゝゑまれ給としくれぬ内のとの

る所におはしますにたいふの命婦まいれり御けつ

りくしなどにはけさうたつすちなく心やすき

【補考】

後伏見院筆とされる本断簡の本紙には朱点が認められる。『昭和古筆名葉集』にも、「四半 源氏朱書入點アリ」と記載されているため、本断簡がこの「四半切」にあてはまるであろう。本文は省略されており、『古筆学大成』では「梗概本」に位置付けられている。ツレは、国宝手鑑「見努世友」（出光美術館蔵）や『源氏物語断簡集成』のうち「伝後伏見天皇宸翰源氏物語（丙）」のほか、『古筆学大成』、『国文学古筆切入門』、『平成新修古筆資料集』「第一集」、『人物で読む源氏物語』「光源氏Ⅰ」「女三の宮」などに確認できる。（西片）

16 後二条院 四半切〔古今集〕

①「後二条院<sup>あふくまに</sup>」村守（黒）「分家三代古筆了仲

②楮紙か

③二三・一×二三・八センチ

④古今和歌集 一〇八七〜一〇九四詞書

⑤鎌倉時代

⑥後二条天皇（第九十四代天皇、後宇多天皇第一皇子、一二八五―一三〇八）

【翻刻】

みちのくうた

あふくまにきりたちわたりあけぬとも

君をはやらしまてはずへなし

みちのくはいつくあはれとしほかまの浦こく舟のつ

わかせこをみやこにやりてしほかまのまかきのしま

おくるさきみつのこしまの人ならば宮このつとにいさとい

みさふらみみかさと申せ宮木の、この下つゆはあめに

もかみかはのほれはくたるいな舟のいなにはあらず

君を、きてあたし心を我もたは末のまつ山

さかみうた

【補考】

本紙の下部は、本紙が擦れて消えているため解説不能。『皇室の至宝 東山御文庫御物』にも伝後二条天皇の『古今和歌集』を所収しているが、本断簡のツレではない。筆跡の近いものは『古筆切影印解説Ⅰ』にみられる。本断簡の右端には、直前の歌の左註である「これは今上の御べのあふみのうた」のうち「今上の」と反転した文字が写ることから、もとは冊子本の見開き左頁であったことがわかる。（西片）

17 大藏卿有家 墨流切（多田切）〔新古今集〕

①「大藏卿有家<sup>あらし吹</sup>」村守（黒）「分家三代古筆了仲

②楮紙（金銀の切箔、墨流し）

③ 一五・七×一二・四センチ

④ 新古今和歌集 四四〇和歌く四四二上句

⑤ 鎌倉時代

⑥ 藤原有家（六条藤家、重家男、一一五五―一二二六）

【翻刻】

あらし吹まくすかはらになくしかは

うらみてのみやつまをこふらむ

前中納言匡房

つまこふるしかのたちとをたつぬれは

さやまかすそに秋風そふく

百首哥獻し時秋の哥

惟明親王

み山への松のこすゑをわたるなり

【補考】

『新古今和歌集』の撰者の一人である藤原有家と伝える本断簡は、金銀の切箔を撒いた墨流しの料紙が用いられた切が多く見られることから名付けられた。しかし、手鑑「見努世友」（出光美術館蔵）や「藻塩草」（京都国立博物館蔵）では「多田切」との名称がつけられている。他にもツレは、手鑑「翰墨城」（MOA美術館蔵）をはじめ、三十葉以上確認することができる。中でも注目されるは、本断簡が京都・観音寺蔵手鑑の断簡の直後にあたることである。他の断簡に一頁八行のものが多く、本断簡が和歌からはじまる点などから、観音寺蔵手鑑所収の断簡の最終二行で「題知らず」「俊恵法師」の二行分が擦り消ちされていることが窺える。（野中）

18 後醍醐院 六半切〔源氏物語〕

① 「後醍醐天皇なかも」  
村守（黒）分家三代古筆了仲

② 楮紙

③ 一六・一×一五・五センチ

④ 源氏物語 帯木

⑤ 鎌倉後期く南北朝時代

⑥ 後醍醐天皇（第九十六代天皇、後宇多天皇第二皇子、一二八八―一三三九）

【翻刻】

なかも給にしおもてのかうしそ、き

あけて人くのそくへかめるすのこの

中のほとにたてたるこさうしのかみ

よりほのかにみえ給へる御ありさまを

身にしむはかりおもへるすき心ともあ

めり月はありあけてひかりおさ

まれるものからかけさやかに見えて

中、をかしきけほの也なに心

なきそらのけしきもた、みる人から

えむに心すこくみゆるなりけり人し

れぬ御こゝろにはいとむねいたくこと

【補考】

後醍醐天皇の筆と伝える本断簡は六半の紙に書写されている。『昭和古筆名葉集』にも「六半 源氏」として記載されている。本断簡のツレとして挙げられるものに、『古筆学大成』所収の源氏物語断簡として二種類の筆が挙げられ

ているが、そのうち「源氏物語切（二）」があたる。この「源氏物語切（二）」の書写内容は、同じく帚木であり、もともと近いツレであることがわかる。筆跡の類似するものには『源氏物語断簡集成』所収の「源氏物語 玉鬘」がある。

（西片）

## 19 高倉殿永慶卿 六半切〔伊勢物語〕

①「高倉殿永慶卿山のはにけて」山琴〔黒〕「本家五代古筆了珉

②斐紙

③一七・二×一七・二センチ

④伊勢物語 八十八段「渚の院」末～八十九段「小野の雪」冒頭

⑤江戸時代前期

⑥高倉永慶（高倉家第二十七代当主、永孝男、一五九二―一六六四）

〔翻刻〕

山のはにけていれすもあらなむ

みこにかはりたてまつりてきのありつね

をしなへて峯もたひらになりなむ

後説  
上野宮姫山の葉なくは月もいらしを

昔みなせにかよひ給しこれたかのみこ

れいのかりしにおはしますともにもうま

のかみなるおきなつかうまつれりひころ

へて宮にかへりたまうけり御をくりして

とくいなむとおもふにおほみきたまひ

ろくたまはむとてつかはさゝりけり

〔補考〕

『伊勢物語』の断簡。もとは冊子本。本紙裏書には「癸酉七」と見られ、本断簡の鑑定者である本家五代古筆了珉（一六四五―一七〇一）の活躍時期から一六九三年七月に鑑定されたものと推定される。また本断簡は、直前に「後醍醐天皇」、直後に「光厳天皇」と南北朝時代の天皇の間に「高倉永慶」という江戸時代の公家を配しているため、一般的な手鑑行列とは大きく異なる。そのため、元々あった断簡が剥がされた折、貼り替えられた断簡と推測される。

（野中）

## 20 光厳院 四半切〔式子内親王集〕

①「光厳院し、せはや」村守〔黒〕「分家二代古筆了任

②楮紙

③二二・八×一四・二センチ

④式子内親王集（第三〇〇集 二七六～二七九上旬）

⑤南北朝時代

⑥光厳天皇（北朝初代天皇、後伏見天皇第三皇子、一三一三―一三六四）

〔翻刻〕

しらせはやすかたの池のはなかつみ

かつみるまゝに浪にしほると

わきもこか玉ものすそによるなみの

勅よるとはなしにほさぬそてかな

あふことはとをつのはまのいはつし

いはてやくちむそむるころを

新古わか袖はかりにもひめやくれなるの



【補考】

『式子内親王集』の断簡。もとは冊子本。『統国文学古筆切入門』所収の断簡のほか、出光美術館所蔵の断簡にもツレを確認することができる。この二葉は続く断簡であり、向かい合わせの頁構成となっている。本断簡は、これら二葉とも比較的近くの頁と思われる、重なる虫損も見られる。本断簡での虫損部は、裏打紙で補修したうえで、後世の筆によって補っている。（野中）

21 後光厳院 六半切〔古今集〕

①「後光厳院<sup>思みたれて</sup>」  
村守（黒）「分家三代古筆了仲

② 楮紙か

③ 一五・四×一五・七センチ

④ 古今和歌集 一〇〇一途中

⑤ 南北朝時代

⑥ 後光厳天皇（北朝第四代天皇、光厳天皇第二皇子、一三三八—一三七四）

【翻刻】

思みたれて ふるゆきの けなはけぬへく

おもへとも てのすになれは なをやます

思はふかし あしひきの やましたみつの

こかくれて たきつこゝろをは たれにかも

あひかたらむ いろにいては 人しりぬへし

墨染の ゆふへになれは ひとりいて

あはれくと なげきあまり せんすへなみに

にはにいて、 たかたちやすらへは 白たへの

衣のそてに をくしもの けなはけぬへく

思へとも 尚なけれぬ はるかすみ

よそにも人に あはんと思へは

古歌たてまつりける時

【補考】

もとは冊子本。伝称筆者を後光厳天皇とする『古今和歌集』の断簡には、『昭和古筆名葉集』に「尾張切 四半古今又ハ後撰」と「六半 古今集歌二行書」の二つが見られるが、本断簡は後者にあたるか。しかし、長歌の箇所であるため、歌が二行書であったか確認することはできない。また、一連の古筆切と思われる断簡も確認することはできなかった。（野中）

22 為家卿 六半切〔古今集〕

①「為家卿<sup>しかのおきかし</sup>」  
村守（黒）「分家三代古筆了仲

② 楮紙（雲母撒き）

③ 一六・一×一五・五センチ

④ 古今和歌集仮名序

⑤ 鎌倉時代

⑥ 藤原為家（藤原定家男、一一九八—一二七五）

【翻刻】

しかのおきふしはつらゆき

らかこのよにおなしくむまれ

てこのことるときにあへるをな

むよろこひぬる人まるなく

なりにたれとうたのことと、ま

れるかなたとひとときうつり  
ことさりのしひかなしひ  
ゆきかふともこのうたのもし  
あるをやあをやきのいとたえす  
まつのはのちりうせすしてま  
さぎのかつらなくつたはり

【備考】

『古今和歌集』の断簡。もとは冊子本。伝称筆者を為家とする『古今和歌集』の断簡は多くの種類を確認することができるが、本断簡は『古筆学大成』によるところの「古今和歌集切(四)」(今治市河野信一記念文化館蔵)のツレか。その解説には、「今日、確認した唯一の断簡」とあることから、本断簡はその後新しく確認できた一葉と位置づけられる。(野中)

23 後円融院 四半切〔新古今集〕

- ① 後円融院 いかにせむ 随道(朱) 三代畠山牛庵
- ② 斐紙
- ③ 三三・五×一五・六センチ
- ④ 新古今和歌集 一一六六詞書途中 一一六八上句
- ⑤ 南北朝時代
- ⑥ 後円融天皇(北朝第五代天皇、後光厳天皇第二皇子、一三五九—一三九三)

【翻刻】

と聞ける人につかはしける

相模

いかにせむくすのうらふく秋風に  
した葉の露のかくれなき身を  
題しらす 実方朝臣  
明かたきふた見のうらによる浪の  
袖のみぬれておきつしま人  
伊勢  
あふことのあけぬ夜なから明ぬれは

【備考】

後円融天皇筆の四半切『新古今和歌集』は、『古筆切影印解説Ⅲ』にも所収しているが、筆跡が異なる。書写される歌番号は遠いため、自然と筆が変わってしまふことを加味したとしても、同一人物の筆跡と判断することは難しい。本断簡の左上部に、一一六八番の歌の下の句である「我こそ」という写りが窺うことができる。そのため、もとは冊子本の見開き右頁にあったことがわかる。(西片)

24 後陽成院 短冊

- ① 「後陽成院 秋はなを 村守(黒) 分家三代古筆了仲
- ② 斐紙(雲紙に金銀泥の下絵)
- ③ 三六・四×五・六センチ
- ④ 古歌(和漢朗詠集二二九他、詠者・藤原義孝)
- ⑤ 江戸時代初期
- ⑥ 後陽成天皇(第一〇七代天皇、誠仁親王第一皇子、一五七二—一六一七)

【翻刻】

秋はなをゆふまくれこそたゝならぬ

萩のうは風はきのした露

【備考】

『和漢朗詠集』所収である藤原義孝の和歌を書した古歌短冊。宸翰には署名を入れないのが通例であるが、本短冊は古歌ということもあり、やはり署名は記入されていない。しかし、極札にある後陽成天皇の真筆と比較すると、各字において一致する点が多く見られることから、後陽成天皇自筆の短冊であると推定される。

(野中)

25 万松院等貴 四半切〔続古今集〕

① 「万松院等貴 山琴」(黒) 本家初代古筆了佐

② 楮紙

③ 二七・八×七・八センチ

④ 続古今和歌集 十七和歌×十八

⑤ 室町時代

⑥ 宗山等貴(貞常親王王子、一四六四—一五二六)

【翻刻】

みわたせは若菜つむへく成にけりくるすのをの、萩の焼はら

正治二年百首歌たてまつりける時春歌

前大納言忠良

わか菜つむ萩のやけはら猶冴て袖にたまるは春のあは雪

【備考】

『続古今和歌集』の断簡。もとは冊子本。永青文庫蔵「手鑑」内にツレを認めるが他には見当たらない。さらに伝称筆者を等貴とする古筆は、「玉海」(徳川美術館蔵)所収の未詳仏書切のみである。なお、本断簡と比較すると、ツレである永青文庫蔵「手鑑」所収断簡は本紙の高さが短く上部の余白が狭いことから、一・五センチほど切られたことがわかる。また、一般的な四半の大きさを想定すると、一頁あたり十行前後だったと推測される。(野中)

26 醍醐聖宝 仏典切〔悉曇字記〕

① 「醍醐聖宝 村守」(黒) 分家二代古筆了任

② 楮紙か

③ 二八・二×二二・〇センチ

④ 悉曇字記(No.2132 五十四卷一一八六頁)

⑤ 平安時代

⑥ 聖宝(平安初期の真言僧、八三二—九〇九)

【翻刻】

第七章將 𑖀 囊字合初章字之下名

𑖀 迦那 𑖀 迦那生字三百八十有四

第八章將半鉢 𑖀 囉加初章字之上名

𑖀 阿勒迦 𑖀 阿勒迦生字三百九

十有六 勅字力感  
反下同

【備考】

三行目の「初章」の間に「初」字の遺脱があるほかは『悉曇字記』と一致す

るため、同書を書写した仏書切となる。本紙には金罫が施されているほか、片仮名による振仮名・送仮名、平古止点と思しき朱点が付されている。聖宝を伝称筆者とする切のなかには大聖武様にて書されたものが多く、本切もそれらに倣って聖宝と擬せられたと思われる。『古筆手鑑大成』ほかにツレを見出すことはできないが、『増補新撰古筆名葉集』には「自記切 紙黄鳥ノ子中字梵字墨字入タルモアリ」、「経切 一行十六字方カナ朱星アリ類切多シ」とあり、両者の特徴を有する本仏典切もそうした類切の一つであろうか。(高田)

## 27 近衛殿植家公 短冊

①「近衛殿植家公今さらに」村守(黒)「分家二代古筆了任

②斐紙(雲紙に金泥の下絵)

③三四・一×五・一センチ

④自詠和歌か

⑤室町時代か

⑥近衛植家(戦国時代の公家、近衛家第十五代当主、一五〇二—一五六六)

### 【翻刻】

欲別恋  
今さらになれぬむかしそしたはる、  
後のわかれをかねておもへは

### 【備考】

ほかに同歌を見ることができないが、近衛植家の自詠和歌か。本来、自詠和歌の場合は詠者の署名が入るが見られない。実見する限りでは、擦り消し等の消した痕跡は確認できない。しかし、植家の真筆と比較すると、一画目と二画目が一画に繋がっている特徴的な「ぬ」など一致する点は多く見られる。(野中)

## 28 後花園院 四半切(金葉集(二度本か))

①「後花園院草のはに」村守(黒)「分家三代古筆了任

②楮紙か

③二七・八×一九・二センチ

④金葉和歌集 二度本・六四五詞書途中(六四五(三奏本・六三七〜六三九)

⑤室町時代

⑥後花園天皇(第一〇二代天皇、伏見宮貞成親王〔後崇光院〕第一皇子、一四一九—一四七〇)

### 【翻刻】

しとみのもとにいれておほちにをきたりける  
にくさの露のあしにさはりけるほとにほ  
と、きすのなきければいきのしたに

田口重如 山口重如也其河内重如河内國人也

草のはにかとはしたりほと、きすしての山ちもかくや露  
かくてつひにおちいるとてよめる けき

たゆみなくこゝろをかくるみたほとけ人やりならぬちかひたかふ  
屏風繪に天王寺西門にてみれば僧の な

ふねにのりてにしさまにこきはなれて  
ゆくかたかきたるところを見てよめる

源俊頼朝臣

あみたふととなふるこゑをかちにしてくるしきうみをこ  
きはなるらむ

### 【備考】

伝称筆者を後花園天皇とする『金葉和歌集』は、特別展「やまとうた一千

年」(五島美術館 二〇〇五年)にて展示された、上下二巻の完本(個人蔵)が伝えられる。本文の書は、室町時代の特徴を有し、この完本とも類似する点が多々見られる。この完本が「二度本」であるため、本断簡が同筆だとすると同じく「二度本」であつたろうか。また、朱による訂正が入られている点も注目される。

(野中)

## 29 陽光院 八半切〔百人一首〕

①「陽光院佐ぬれば」村守(黒)「分家三代古筆了仲

②楮紙

③一〇・七×七・九センチ

④百人一首 二十

⑤安土桃山時代

⑥誠仁親王(追尊天皇(陽光太上天皇)、正親町天皇第五皇子、一五五二—一五八六)

〔翻刻〕

元良親王

佐ぬれば今はたおなし

難波なる

身をつくしても

あはむとぞ思

〔補考〕

『百人一首』に採られている元良親王の和歌一首を散らし書きで書かれている本断簡。もとは冊子本であるが、最終行の「あはむ」の上に次頁の「素」の

字が反転して見られる。これは『百人一首』で次の歌人にあたる「素性法師」かと思われる。手鑑「披香殿」(川崎市市民ミュージアム蔵)内にも同様の『百人一首』の断簡が窺えるが、金銀泥での下絵が施されており、また本紙の高さも本断簡より二センチほど短いものである。しかし、この「披香殿」所収の断簡の下絵は文字を避けているように見えることから、後世による後書きによるものであり、本断簡との関係を今後考察する必要がある。

(野中)

## 30 正親町院 四半切〔和漢聯句〕

①「正親町院冬も猶」村守(黒)「分家三代古筆了仲

②楮紙

③二三・八×九・六センチ

④和漢聯句(享祿元年十月十三日和漢百韻一〜七)

⑤安土桃山時代

⑥正親町天皇(第一〇六代天皇、後奈良天皇第一皇子、一五一七—一五九三)

〔翻刻〕

和漢享祿元 十 十三

冬も猶菊をときはの砌かな 實世

春 小 好 風 光 文 山

日影さす外山のあさけ鳥鳴て 帥大納言

舟こきいつる里の川浪

除 月 無 心 友 菅 中

約 秋 有 女 郎 新 中

暑 残 紈 買 籠 範 久

【補考】

『和漢聯句』の断簡。もとは冊子本。伝称筆者を正親町天皇とする『和漢聯句』の断簡は他には見られない。その書は現存する正親町天皇の筆跡と比較すると、「山」や「あ」など共通する点が多く見られる。仮に正親町天皇の真筆とすると、享祿元年（一五二八年）の聯句を含む本断簡は現在底本とされる国立国会図書館蔵「連歌合集 三十」よりも時代が上ることになるか。なお、本断簡は、通常の四半とするものよりも小さいため、小四半というべきものか。  
(野中)

31 二条殿康道公 色紙

- ① 二条殿康道公<sup>晩葉</sup> 〔養心〕(黒) 三代神田道徳
- ② 楮紙(金泥の下絵)
- ③ 二〇・六×一七・五センチ
- ④ 和漢朗詠集一三七 あるいは白氏文集か
- ⑤ 江戸時代前期
- ⑥ 二条康道(二条家第十六代当主、一六〇七—一六六六)

【翻刻】

晩葉尚開紅  
躑躅秋房初  
結白芙蓉

【補考】

『和漢朗詠集』所収の漢詩を書した色紙。『白氏文集』から「彼(元十八)」が廬山の溪谷に作った住居を訪れ、そこに題した(川口久雄著『和漢朗詠集』)

講談社学術文庫 一九八二年初版)七言律詩の頷聯であることが窺える。伝称筆者とされる二条康道の書は、尊純法親王(一五九一—一六五三)を祖とする尊純流に属する。縦画が左下へ流れる点は、康道の真筆と通じる特徴である。  
(野中)

32 弁慶 経切〔蓮華面経〕

- ① なし
- ② 紺紙金泥
- ③ 二三・七×二一・〇センチ
- ④ 蓮華面経卷上 (Z038) 十二卷一〇七二頁
- ⑤ 平安時代
- ⑥ 弁慶(平安時代末期の僧兵、?—一一八九)

【翻刻】

女家復有比丘姪比丘尼復有比丘貯畜金  
銀造作生業以自活命復有比丘通致使驛  
以自活命復有比丘專行翳藥以自活命復  
有比丘圍碁六博以自活命復有比丘為他  
卜筮以自活命復有比丘為他呪彼死尸令  
起遣殺怨家以自活命復有比丘為他誦呪  
驅遣鬼神多取財物以自活命復有比丘專  
行殺生以自活命復有比丘住僧伽藍私自  
費用佛法僧物以自活命復有比丘内實犯  
戒外示護持受人信施復有比丘雖不破戒  
而懷慳惜衣服飲食及以鄙悋衆僧之物不

與客僧復有比丘雖不破戒恪惜衆僧房舎  
牀座不與客僧復有比丘雖不破戒為諸檀

續粧泣尋沙  
塞出家郷

ことになしけれ  
鹿のなくねに  
めをさましつゝ、

### 【補考】

本経切は極札がないため、伝称筆者として挙げた弁慶は本古筆手鑑附属の「古筆手鑑目録」によつた。本紙にみえる銀野は文字の上にも引かれていることから後補と思われる。武藏坊弁慶とされる古筆は少なく、『古筆名葉集』ほかの諸資料のなかにも取り上げられていない。『出典判明仏書・経切一覽稿』においても伝称筆者を弁慶とするものとしては、『大般若経』のほか『経律異相』が挙げられているに留まっている。  
(高田)

### 33・34 近衛殿信尹公 色紙

- ① 33、「近衛殿信尹公」翠黛紅顔 村守 (黒)「分家三代古筆了仲
- ② 33、楮紙(雲龍文)
- ③ 33、二一・八×一九・二センチ
- ④ 33、和漢朗詠集七〇〇(大江朝綱)か
- ① 34、「近衛殿信尹公」山さとは 村守 (黒)「分家三代古筆了仲
- ② 34、楮紙(雲龍文)
- ③ 34、二二・〇×一九・〇センチ
- ④ 34、古今和歌集二二四(壬生忠岑)か
- ⑤ 江戸時代初期
- ⑥ 近衛信尹(安土桃山時代の公家、号は三藐院、一五六五―一六一四)

### 【翻刻】

33、翠黛紅顔錦

34、山さとは秋こそ

### 35 照高院殿道晃親王 短冊

- ① 「照高院殿道晃親王」さかぬまは 山琴 (黒)「本家五代古筆了珉
- ② 斐紙(金の箔・金泥の下絵)
- ③ 三六・四×五・八センチ
- ④ 古歌(続後撰和歌集七二、詠者・藤原季経)
- ⑤ 安土桃山時代、江戸時代前期か
- ⑥ 道晃法親王(江戸前期の親王、後陽成天皇第十一皇子、一六二―一六七九)

### 【翻刻】

さかぬまは花かとみえし白雲に  
またまかひぬる山さくらかな

### 【補考】

『続後撰和歌集』所収の藤原季経の和歌一首を書した短冊。古歌短冊の書式の通り、二行目を一文字下げ、また署名もない。しかし、極札に従って道晃法

親王の真筆と比較すると、最終部の結びの箇所が下へ特徴的に落ちる「ぬ」をはじめ、一致する文字が見られる。中院流の名手であり、また親王ということから中院家の短冊二葉の前であるこの位置に配されたと推測される。(野中)

### 36 中院古大納言通純卿 短冊

①「中院古大納言通純卿<sup>世中を</sup>」鑑定者不明

「中院殿通純卿<sup>世中を</sup>」**村守** (黒) 分家三代古筆了仲

② 斐紙 (金泥の下絵)

③ 三六・五×五・八センチ

④ 古歌 (新古今和歌集一六一四他、詠者・慈円)

⑤ 江戸時代前期

⑥ 中院通純 (江戸時代前期の公卿、一六一二—一六五三年)

#### 〔翻刻〕

世中をこゝろたかくもいとふかな

ふしの煙を身の思ひにて

#### 〔補考〕

『新古今和歌集』所収の慈円の和歌を書した古歌短冊。中院流の祖である中院通村を父に持つ通純と伝えるが、やはり古歌短冊であるため本短冊にも署名はない。書は中院流の特徴を伝え、他の通純の短冊と比較しても類似しているが、真筆と断定するには至らなかった。(野中)

### 37 中院殿通村公 短冊

①「中院殿<sup>通村公 芳野山</sup>」**重** (黒) 分家初代古筆了雪

② 斐紙 (雲紙に金泥の下絵)

③ 三六・二×五・一センチ

④ 古歌 (新古今和歌集一四七他、詠者・後京極良経)

⑤ 江戸時代前期

⑥ 中院通村 (江戸時代前期の公卿、一五八八—一六五三)

#### 〔翻刻〕

芳野山花の故郷跡たえて

むなしき枝に春かせそふく

#### 〔補考〕

『新古今和歌集』所収である後京極良経の和歌を書した古歌短冊。本短冊も古歌短冊の書式通り、署名はない。中院流の祖である中院通村と伝えるが、特徴的な字形の「き」や終筆を高い位置で結ぶ「に(尔)」は他の真筆と一致することから、本短冊も極札通り通村のものと考えられる。しかし、息子である通純のあとに本短冊が配されている点は、一般的な手鑑行列と反している。(野中)

#### 〔主要参考文献〕

・小松茂美 『古筆学大成 (全三十巻)』 (講談社 一九八九年)

・古筆手鑑大成編集委員会 『古筆手鑑大成 (全十六巻)』

(角川書店 一九八三年)

・小松茂美 『日本書蹟大鑑 (全二十五巻)』 (講談社 一九七八年)



・徳川黎明会『徳川黎明会叢書 古筆手鑑篇一』五

(思文閣出版 一九九五年)

・久曾神昇『古筆切影印解説(全四卷)』(風間書房 一九九五年)

・春名好重『古筆大辞典』(淡交社 一九七九年)

・藤井隆・田中登『国文学古筆切入門(三部作)』(和泉選書 一九八五年)

・伊井春樹『古筆切資料集成(全六卷)』(思文閣出版 一九八九年)

・田中登『平成新集古筆名葉集一』五(思文閣出版 二〇〇〇年)

・毎日新聞社至宝委員会事務局『皇室の至宝東山御文庫御物(全五卷)』

(毎日新聞社 一九九九年)

・久曾神昇『源氏物語断簡集成』(汲古書院 二〇〇〇年)

・古谷稔『古筆手鑑・披香殿』(淡交社 一九九九年)

・永青文庫『細川家永青文庫叢書 別巻 手鑑』(汲古書院 一九八五年)

・久保木哲夫ほか『古筆手鑑叢刊I 宮内庁書陵部蔵 古筆手鑑』

(貴重本刊行会 一九九九年)

・『出光美術館蔵品図録 書』(平凡社 一九九二年)

・村上翠亭・高城弘一『古筆鑑定必携 古筆切と極札』(淡交社 二〇〇四年)

・小林強・高城弘一『古筆切研究 第一集』(思文閣出版 二〇〇〇年)

・小林強『出典判明仏書・経切一覽稿』

(大東文化人文学研究所 二〇一〇年)

・伊井春樹『新版古筆名葉集』(和泉書院 一九八八年)

・高城弘一『覆刻昭和古筆名葉集』(大東文化人文学研究所 二〇一二年)

・『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』(角川書店 一九八三年)

・上原作和『人物で読む『源氏物語』(全二十卷)』(勉誠出版 二〇〇五年)

・京都大学国文学研究室・中国文学研究室『室町前期和漢聯句作品集』

(臨川書店 二〇〇八年)

・川口久雄『和漢朗詠集』(講談社 初版一九八二年)

・『やまとうた一千年 古今集から新古今集の名筆をたどる』

(五島美術館 二〇〇六年)

・『大東文化大学所蔵 貴重書跡図録目録I』

(大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻 二〇一一年)

・高田信敬『古筆切目安(翻字・索引・解題)』

(鶴見大学紀要』第二三三号 一九八六年)

・武田則夫『翻刻古筆切名物』(『MUSEUM』二二六号 一九七〇年)